

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅終末期心不全緩和ケアにおける当クリニック看護師の役割
演者名	伊東 紀揮、弓野 大、星 敬美、吉田 真希、堀部 秀夫
所属	ゆみのハートクリニック

本邦でも「循環器疾患における末期医療に関する提言」にて緩和ケアの必要性が提言され、各医療機関でその取り組みが報告されている中、在宅における心不全緩和ケアに対する取り組みの報告は少ない。また在宅における非がん患者の看取り数の中でも、心疾患の看取りは僅かに 6 % との研究報告もあり、心不全患者の予後予測の困難さや、症状緩和の困難さなどを意味しているものと考えられる。

当クリニック 2012 年 9 月の開院から 2014 年 7 月現在まで、在宅医療を行っている延患者数 253 名中、心不全患者数は 133 名 (約 53%) であった。その内、終末期心不全患者 20 名の自宅看取りを経験した。その経験から、患者自身の症状緩和と同様に、①介護者の不安や負担に対するケア、②多職種、多施設による連携、③訪問看護師、ケアマネージャーなど関わる職種の終末期心不全に対する不安、以上の点が、在宅でのホスピス・緩和ケアを継続するためのキーポイントであると考え、それらに対する対応の不足も在宅での心不全患者看取り数の少なさに影響していると推察出来た。そこでクリニック看護師が上記のキーポイントに対するアプローチをするとともに、心不全ケアを訪問看護師とともに実践することで、終末期心不全増悪による再入院をすることなく、患者・家族の意に沿って在宅で最期を迎えられている一因として役割を担っている。

今回、在宅において看取りまで至ったケースを提示し、在宅終末期心不全患者の緩和ケアにおけるクリニック看護師の役割を報告する。